

心理動詞と語彙構造

羽 鳥 百合子

1. はじめに

言語の習得可能性を説明すべき言語理論は、子供が経験的に獲得する必要のある情報をなるべく狭くしぼりきるものでなければならない。語彙部門における意味的な構造から統語構造が完全に予測されるものであれば、子供は語彙的な情報(=θ役割)を習得するだけでよいことになり、この目的にかなうものとなる。Jackendoff (1972)の主題階層の条件(Thematic Hierarchy Condition)は、部分的ではあるが、このような語彙構造と統語構造との一貫した関係を説明しようとした試みである。Baker (1988)によって提案された Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)は、θ役割間の同一の関係はD構造における同一の統語関係として表わされなければならないとし、主題関係と統語構造の対応関係を最も強い形で規定したものである。一方、θ役割そのものをより厳密に定義し直し、語彙部門において意味に直接関わる語彙的概念構造(Lexical Conceptual Structure)とそれを統語構造に結びつけるべき中間レベルとしての項構造(Predicate Argument Structure, Argument Structure)¹とを区別する必要性が、Rappaport & Levin (1986), Zubizarreta (1987), Grimshaw (1990)等によって論じられている。このレベルでは外項・内項・直接項・間接項など述語動詞とそれが取る項との構造的関係が表示され、ここでは具体的なθ役割の中身は問題にならない。

語彙構造から統語構造への投射に関わる原則を追究していく理論にとって、常に問題を投げかけてきたのが心理動詞を含む構文であることはよく知られている。例えば、(1a)と(1b)とでは、恐れを感じている者(Experiencer)即ち John と恐れを感じさせているもの(Theme)即ち this dog の統語的な実現の仕方が動詞 fear と frighten とで逆になっている。同様のことがイタリア語の動詞 temere と preoccupare についても言え、イタリア語では更に Experiencer が前置詞の目的語として与格で現れる piacere 型の動詞も存在する。²

- (1) a. John fears this dog.
b. This dog frightens John.
- (2) a. Gianni teme questo. 'Gianni fears this'

- b. Questo preoccupa Gianni. 'this worries Gianni'
- c. A Gianni piace questo. / Questo piace a Gianni.
'to Gianni pleases this' 'this pleases to Gianni'

英語の frighten やイタリア語の preoccupare は、Theme が統語的な主語として現れるという点で特異である。Belletti & Rizzi (1988) は、preoccupare 型心理動詞構文の統語構造をより複雑にすることによって、 θ 役割と統語構造との対応関係を保持しようとした。即ち、この構文を深層では主語をもたない非対格構文として扱おうとしたのである。しかし、これに対しては様々な問題点が指摘された。特に、preoccupare 型構文の主語は派生主語とは考えにくいという反例がいくつか提出されている。³

統語構造の精密化に解決を求めた Belletti & Rizzi とは逆に、 θ 役割を精密化していく方向をとった分析が最近いくつか提案されている。本論文では、そのうち Pesetsky (1990) と Grimshaw (1990) を取り上げ、各々の問題点を考察する。更に、心理動詞から派生した ed 形容詞及び ing 形容詞の位置づけが、各々の分析の妥当性を考える上で重要な役割を果たすことを指摘する。また、これらの形容詞を一般性のある形で捉えるには、先に述べた中間レベルとしての項構造が有効であることを示す。

2. 使役構文としての分析⁴

なぜある種の心理動詞において Theme が主語として現れるのか。この問いに対して、Pesetsky や Grimshaw は、frighten 型構文は意味的に一種の使役文であるとみなしている。これは、(3a) が (3b) とほぼ同義であるという事実を語彙構造に反映しようとするものである。

- (3) a. The storm frightened us.
- b. The storm caused us to experience fear. (G)

事実、日本語のような言語では、frighten 型の構文はすべて使役文として現れる。

- (4) a. その犬がジョンを恐がらせた。
- b. 彼の行動はいつも私たちに心配させる。

また、frighten 型構文における一見束縛原理に反していると思われる現象(5)は、(6)のような使役文でも共通にみられる。

- (5) a. *Each other's*_i supporters worried *Freud and Jung*_i.
- b. *Each other's*_i remarks annoyed *John and Mary*_i.
- (6) a. *Each other's*_i remarks made *John and Mary*_i angry.

b. *Each other's*_i criticisms forced *John and Mary*_i to confront their problems.

(7) 自分_iが癌かもしれないことが浩_iを悩ませた。 (P)

(5)–(7)に共通していることは、照応形を含む主語が先行詞における状態の変化を引き起こす原因になっているという点である。

2.1. Pesetsky の分析

Pesetsky は、fear 型の動詞の目的語として現れる Theme と frighten 型の動詞の主語として現れる Theme は全く別々の θ 役割であり、前者は感情の「的」或は「主題となる事柄」(Pesetsky は Target/Subject Matter 略して T/SM と呼んでいる)であり、後者は「原因」(Cause)であるとする。

(8) a. John worried about *the television set*. (T/SM)

b. *The television set* worried John. (Cause)

従って、T/SM と Cause との統語的な現れ方が異なっても、何ら不思議なことではなく、UTAH を保持できる。しかし、この分析にとって最も問題になるのは、次のような非文の存在である。

(9) a. *The article in the Times angered Bill at the government.

b. *The Chinese dinner satisfied Bill with his trip to Beijing. (P)

明らかに T/SM と Cause とは同じ文に同時に生起しない(T/SM 制約)。従来の分析のように、どちらも Theme として等しい θ 役割が与えられていれば、この非文は θ 基準の当然の帰結であるが、別々の θ 役割であるとするれば、なぜこの2つが共起できないのかを説明する必要が生ずる。

Pesetsky は、frighten 型動詞 (Pesetsky はこれを EO と呼ぶ) 例えば annoy は、CAUS という音形ゼロの形態素が fear 型の語幹 (Pesetsky はこれを ES と呼ぶ)⁵ annoy に付いてできた派生的複合語 annoy-CAUS であるという。このようなゼロ派生形は、内項として [+affected] な要素を取るという一般的な制約 (Affectedness Constraint) に従わなければならない。T/SM は意味的に [-affected] であるから、この制約により annoy-CAUS は T/SM を更に内項としてとることはできず、(9)の非文性が説明できるとしている。Pesetsky は、ゼロ形態素 CAUS の証拠として、frighten 型の動詞が名詞化されない事実を挙げ、これは Myers がゼロ派生形を広範に調べた結果示した次のような一般化に基づくものであるとしている。

(10) Myers の一般化

ゼロ派生語には、更に派生接辞を付加することはできない

この一般化に従えば、(11)が許されないのは、*agitate-CAUS* や *annoy-CAUS* に更に *-tion* や *-ance* をつけることができないからである。

- (11) a. *The exam's continual agitation of Bill was silly.
 b. *Our constant annoyance of Mary got on our nerves. (P)

しかし、Pesetsky が心理動詞+CAUS について Myers の一般化を支持するとして挙げているのは、名詞化の例のみである。むしろ、反例となるべき例の方が多く、これをより体系的に扱うことができないければ、Myers の一般化による説明は説得力がない。

- (12) a. John is an *annoyer* of little children.
 b. In general, Queen Victoria was not *amusable*. (P)

Pesetsky 自身が挙げているこのような *er* 名詞または *able* 形容詞以外に、後述する *ed* 形容詞、*ing* 形容詞もこれを派生接辞とみなすのであれば反例となる。

更に、Pesetsky 自身も指摘するように、T/SM 制約そのものにも反例になるようなものが多数ある。Pesetsky は、これをいくつかのタイプに分けて検討しているが、その方向は θ 役割を更に精密化することである。例えば(13)の *inspire* や *stimulate* のように鼓舞、激励の意味をもつ動詞は、その結果としてある *action* あるいは *exertions* を生ぜしめるという点で、*action* や *exertions* が *Created* または *Instantiated* という意味を担う。これは [+affected] であり、T/SM と解釈する必要はないとする。

- (13) a. Sue's remarks inspired them to action.
 b. It stimulated us to greater exertions. (P)

しかし、様々な前置詞句に厳密にどのような θ 役割を付するのが適当なのか、その基準はきわめて恣意的になりやすい。問題は、Pesetsky が(8a)や(14)のような文と *fear* 型の構文とを主語が *Experiencer* であるということによって同一に扱っている点であろう。

- (14) a. Bill was very angry at the article in the Times.
 b. Bill was content with the Chinese dinner. (P)

Pesetsky が挙げている例⁶の中で、純粹に *fear* 型の動詞つまり直接目的語をとる動詞は、*like* (*love, adore*), *dislike* (*hate, detest*), *resent, fear* だけである。他は、前置詞句を伴う動詞 *rejoice* (*at*), *worry* (*about*), *puzzle* (*over*), *grieve* (*over/at*), または、動詞ではなく形容詞 *angry* (*at*), *satisfied/content* (*with*), *bored* (*with*), *afraid* (*of*) である。ここに挙げた前置詞 *at, with, about, over* は、確かになんらかの意味で感情の向かう対象を表わしてはいるが、中には述語動詞との結びつきの強いものもあれば、他のものに置き換えられるものもある。(13)のように更にデータを広げて *inspired* (*to*), *stimulated* (*to*), *interested* (*in*) なども考慮に入れ

始めると、果してどのような基準で T/SM という θ 役割を付与するのか、或はしないのかという疑問が生じる。仮にある種のものが T/SM 制約を免れることの説明が可能になっても、そのことによってこれらの動詞と心理動詞とが共有している性質を一般的に捉えることができなくなってしまう恐れがある。また、frighten 型の語幹となるべき ES が EO と同じ音形の動詞として実在するものは数少ない。worry などはその例であるが、大多数のものは抽象的な拘束形態素としての語幹を仮定することになり、決してそれだけで実現することはない。むしろ上述のような形容詞構文として現れることも多い。例えば、EO の frighten に対応する ES としての frighten は実現しないし、EO の anger に対して実在するのは、形容詞 angry である。しかし、Pesetsky の形態論では、形容詞 angry と動詞 anger とは直接に結びつかないで、抽象的な ES 語幹 = anger を仮定しなければならない。このような抽象的な形態素を多数認める方向は、子供の習得可能性を説明しようとする言語理論の目標からそれてしまうのではないだろうか。

2.2. Grimshaw の分析

Grimshaw (1990) は、意味役割の構造を単層と考えずに、より複合的な層をなしていると考えている。⁷ Grimshaw の心理動詞の項構造は次のようなものである。

- (15) a. Psychological causative: *frighten*

(Exp (Theme))

2 1

- b. Psychological state: *fear*

(Exp (Theme))

1 2

ここで上段に書かれているのが、従来の θ 役割間の構造的な階層を示したものである。下段の数字は、相に関する相対的顕著性 (prominence) を示している。例えば、(15a) の frighten の場合は、 θ 階層では Experiencer の方が Theme より構造的に顕著であるが、相階層では使役の原因に相当する要素の方が顕著である (数字の 1 で示されている)。D 構造の主語としては、相階層で顕著なものの方が現れる。従って frighten の主語として θ 階層で低位にある項 Theme が選ばれていることに問題がなくなる。また Grimshaw は、いわゆる外項 (external argument) を項構造の両階層において最も顕著なものとして定義する。frighten の場合は両階層で顕著なものに衝突が起こるため、外項は指定されない。frighten 型構文が一般の他動詞構文とは異なった特有の性質を示すのは、各々の階層における相対的顕著性と、外項が存在しな

いということから説明できるとしている。

例えば、(16a)に対して(16b)のような複合語が存在するのに、(17a)に対する(17b)のような複合語は許されない。

- (16) a. Man fears god.
 b. a god-fearing man
- (17) a. God frightens man.
 b. *a man-frightening god (G)

これは、複合語を形成する場合には項構造における顕著性の低いものから先に複合語の内部に組み込まれていくという原則により、(16a)の god は man に対して θ 階層で低位にあるが、(17a)の man は、 θ 階層で god より上位にある為に不可になると説明している。

また、(18a)のような派生名詞あるいは ing 名詞構文が存在しないのは、これらが外項を抑止 (suppress) することによって生じる構文であるため、外項をもたない frighten 型の動詞からは派生しないということになる。

- (18) a. *the event's embarrassment/humiliation of Mary
 b. *the depressing of the patients
 c. *the worrying of the public

Grimshaw の分析は、一見それまでの分析の問題点をうまく克服しているように思われる。例えば、Pesetsky の分析でうまく捉えられていない fear 型動詞の目的語と frighten 型動詞の主語の意味役割の間にみられる一貫した関係、例えば(9)の非文性は従来のような θ 階層で説明でき、かつ Pesetsky が捉えようとした frighten 型構文の使役性は相階層で説明できる。また、frighten 型動詞の主語は相階層で決まり、決して派生主語ではないとすることによって、Belletti & Rizzi の非対格構文分析によっては説明できなかったイタリア語の preoccupare 型構文の特性が説明可能になる。しかし、Grimshaw の分析には次のような問題点がある。

第一に、Grimshaw が(15a)のような項構造を与えているのは、彼女が psychological causative と呼ぶ frighten の用法であり、動詞 frighten にはこれ以外に agentive psychological causative と呼ばれている用法がある。Grimshaw は後者に対しては次のような θ 構造を与えており、これは相構造との間に顕著性の衝突を起こさず、普通の他動詞のように外項も指定される。従って、外項を抑止することによって生ずる派生名詞も受動文も可能である。

- (19) Agentive psychological causative: *frighten*
 (Agent (Exp))
 1 2

- (20) a. John's (public) embarrassment of Mary
 b. The entertaining/amusing of children is my job.
 c. People are being terrified by the government. (G)

しかし、Grimshaw 自身が注で触れているように、(21a)も(21b)と同様に非文である。

- (21) a. *John frightened Mary of/at the ghost.
 b. *The movie frightened Mary of the ghost. (G)

(21b)が2つの Theme をもつことで排除されるとすれば、(21a)も同様にして排除されなければならないが、Grimshaw の項構造では、(21a)の John は Agent, Mary は Experiencer, (of/at) the ghost は Theme ということになり、 θ 基準では排除されない。⁸

また、(22a=17b)は god が Agent の読みでも依然として許されないし、(22b)も非文である。

- (22) a. *a man-frightening god
 b. *a child-amusing man

Agentive な読みの有無は、主語の意志性に関わる問題であり、 θ 構造の相違として扱ってしまふとこのような点が説明できなくなってしまう。

第二の問題は、Grimshaw の外項の定義に関わる。両階層で最も顕著であるということが統語的にどれほど有意であるのか、明確ではない。統語的な主語は相階層で決まり、複合語や照応現象に関わるのは θ 階層である。Grimshaw の分析では、外項はむしろそれが無いということに意味がある消極的存在でしかないように思われる。例えば非対格構文や心理動詞構文の特性は外項が無いということによって説明される。外項そのものが直接にどのような積極的な役割を果たすのかは明らかにされない。しかも、Agentive/Nonagentive の違いが、外項の有無と結びついているが、Agentive/Nonagentive の対比という心理動詞以外にも起こる一般的現象をこのような構造的な問題にしてよいのかという疑問が残る。

- (23) a. John hit the tree.
 b. The car hit the tree.

(23ab)は主語に意志があるかないかの違いであるが、当然どちらも受動態になるし、ing 名詞化も可能である。

- (24) The tree was hit by John/by the car.
 (25) the hitting of the tree by John/by the car

従ってこの場合には Agentive/Nonagentive が Grimshaw 流の項構造の違いには反映されない。同じ Agentive/Nonagentive という意味の対比について一貫した扱いがなされないことになる。外項の有無の問題は更に、受動形の問題としても現れてくるが、この点については次節で詳し

く扱う。

第三に、(26)が容認されないのは Grimshaw によれば、相階層において顕著であるはずの Cause の a storm が non-Cause の a child よりも内部で満たされてしまっているためであるという。

(26) *a storm-frightening child

しかし、(26)が不可なのは、本来きわめて一般的な現象のはずである。(26)は(27)と対応しているが、一般的に主語を先に組み込んだ複合語は容認されない。これは、主語が Cause であるか否かとは無関係であることが(28)(29)によっても分かる。

(27) A storm frightens the child.

(28) a. *student-reading (of books)

b. Students read books.

(29) a. *Mother-making (of cookies)

b. Mother makes some cookies.

主語＝相階層における最も顕著な項であるから、これに関与するのはやはり相階層であるということが出来るかもしれない。しかし、同じことは自動詞に対応する ing 複合語でもみられる。これは、非能格動詞も非対格動詞も区別しない。

(30) a. *boy-laughing

b. *leaf-falling (=Leaves fall.)

c. *train-arriving

Grimshaw は非対格動詞には外項が存在しないとしているが、(30)を正しく捉えるような相構造としてどのようなものを仮定するのか不明である。

以上をまとめると、Grimshaw の項構造の問題は、Agent の扱い方と外項の定義に関わる2つの層の相互関係の曖昧さということになる。この点を更に受動形を取り上げて検討する。

3. 心理動詞の受動形

心理動詞の次のような受動形が動詞的受動形なのか形容詞的受動形なのかは議論の分かれるところである。

(31) a. John was worried (by my remarks).

b. Bill was offended (by Mary's conduct).

一般に、形容詞性を確かめるには次のような基準が考えられるが、従来から指摘されている通

り、ある種の心理動詞の受動形が形容詞であることは間違いないだろう。

i) very や much によって修飾される。

(32) The man was very offended.

ii) 形容詞句を補部としてとるような動詞と共起する。

(33) The man seemed/remained offended.

iii) 名詞の前置修飾が可能である。

(34) the offended man / the frightened girl

iv) 前置詞として by 以外に about, at, with など多様なものをとる。

(35) I am amused with/at/by Mary.

v) 形容詞につく接辞 un- や -ly がついて派生語を生ずる。

(36) a. uninterested, unexcited, unsatisfied

b. worriedly, delightedly, disappointedly

vi) 進行形にならない。

(37) *Mary was being depressed by the situation.

cf. The situation was depressing Mary.

Grimshaw は、心理動詞の受動形はすべて形容詞的であると主張する。なぜなら、動詞的受動形を派生するには外項を抑止しなければいけないが、前節で述べたように、Grimshaw の心理動詞の項構造には外項がないからである。但し、心理動詞の内でも Agentive なものは外項が存在し、外項の抑止によって受動形になると考えている。

一方 Pesetsky にとって、この種の受動形は基本的に動詞的受動形である。彼の EO 動詞はすでにゼロ派生辞をもっているのだから、それに形容詞語尾が直接につくと考えるのは、Myers の一般化(10)に反する。しかし、受動形の中には明らかに形容詞化しているものがあることは確かであるから、Pesetsky は、これは受動形動詞に更にゼロ接辞がついて形容詞化したと考えている。このような形容詞的受動形は、予測通り T/SM 制約に従い、元の動詞の特徴をそのまま引き継いでいる。

(38) a. *Harry was depressed about the election results by the analysis.

b. *John was disgusted with the book by Peter. (P)

しかし、この by 句が省略されると容認可能となり、T/SM 制約に従わない。

(39) a. Harry was depressed about the election results.

b. John was disgusted with the book. (P)

これは ES 語幹に直接形容詞語尾 -ed がついた形容詞として再分析されたものであって、

CAUS を含む上記の形容詞的受動形とは区別したらどうかと示唆している。しかし、(38)と(39)の文法性の違いは、(38)では about the election results と by the analysis という同じ意味機能(=感情の原因)を担う句が二重に生起しているからであると考えるのが自然であり、(38)と(39)の受身的形容詞を全く形態論的に異なったものと考えるのはきわめて一般性を欠いた不自然な分析と言わなければならない。

一方 Grimshaw にも同様の問題がある。Grimshaw は、形容詞的受動形の派生方法を 2 通り提案している。1 つは、(40)のように by 句が義務的に生ずるような場合である。

(40) a. This event was followed/preceded *(by another).

b. The mountain was capped *(by snow). (G)

これらの動詞は外項をもたず、形容詞に転換することによって、むしろ新たに外項が加えられるという。⁹ 従って、by 句ははじめから内項として存在し、形容詞化してもなお義務的に生起しなければならないのである。もう 1 つは、いったん外項の抑止によって動詞的受動形が形成され、それが更に形容詞的受動形に転換したものである。この場合は、抑止された外項が by 句として生起することは許されない。

(41) a. this murdered man

b. *This man is murdered by a thief.

即ち Grimshaw の分析によれば、形容詞的受動形と by 句は義務的に共起しなければいけないか、または共起してはいけないかのいずれかである。

しかし(31)に見られるように、心理動詞の受動形において by 句の生起は随意的である。Grimshaw に従えば、by 句が生ずる場合は Theme としての内項が義務的に現れたものであり、by 句が生じない場合は Agentive な心理動詞の項構造において外項が抑止されたものと考えられることになる。(31)における by 句の有無がこのような根本的な主題構造の相違に根ざしているというのは直観に反する。

以上の Pesetsky と Grimshaw 両者に共通する問題点は、形容詞的受動形と動詞的受動形とを全く異なったものとして扱っていることである。しかし、受動態の形容詞性と動詞性との間には必ずしも明確な線が引けるわけではない。by 句の生起に関しても、進行形の可否に関しても、判断の揺れがあるのが普通である。Quirk et al. (1985)は very と by 句の共起に関して、by 句が人間であるか否かによって容認性が異なることを示唆しているし、Pesetsky は、個々の心理動詞の性質が進行形の可否に影響を与えるという。

(42) a. ?The man was very offended by the policeman.

b. I'm very disturbed by your attitude. (Quirk et al. p. 415)

(43) a. ?? Sue was continually being depressed by odd noises.

b. Sue was continually being scared by odd noises. (P)

以上のことをふまえて、心理動詞の受動形の分析は次の点を満たす必要がある。第一に、形容詞的受動形と動詞的受動形は基本的に同じ主題構造をもつ。これは、ある心理状態の原因になるもの(=Cause)¹⁰とその心理状態を被るもの(=Affected or Experiencer)とからなる。両受動形の相違は、Jackendoff (1990)が意味構造で State と Event として区別したものに相当する。¹¹

(44) a. Thunder frightens Bill. (stative)

b. Harry (deliberately) frightened Bill. (eventive) (Jackendoff p. 140)

第二に、いずれの受動形も外項を抑止するという共通の過程を含んでいる。これは受動形の最も基本的な性質であると考えられる。第三に、形容詞的受動形にともなって現れる前置詞句 by 句とそれ以外の with/at 句は同じ θ 役割(=Cause)を担ったものである。

4. 心理動詞の ing 形容詞

frighten 型心理動詞から派生するもう1つの形容詞として現在分詞形容詞がある。この派生はきわめて productive であり、心理動詞に -ing がついた形容詞は高い頻度で現れる。この種の現在分詞形が形容詞化していることは明白である。(45)–(48)が示すように、very や more を付けることができるし、名詞の前置修飾や seem/remain の後という典型的な形容詞の分布を示す。また形容詞からの派生形を新たにつくることができる。

(45) a. Her views were very alarming.

b. When Bernar moans he's much more convincing.

(46) a. an alarming increase in racial hostility

b. his surprising views

(47) The conference seems/remains still boring.

(48) a. uninteresting, unamusing, unsatisfying

b. surprisingly, interestingly, astonishingly

c. charmingness, revoltingness

しかし、このような心理動詞の現在分詞形容詞には特異な点がある。通常形容詞的に用いられる現在分詞形は自動詞から形成される。

(49) a. a dying man

- b. remaining problems
- c. increasing labour
- d. growing tomatoes

(49cd)は、決して someone increases labour や someone grows tomatoes に対応しているのではなく、labour increases, tomatoes grow に対応しているのである。対格動詞の外項のみを顕在化した次のような例は容認されない。

- (50) a. *a fearing man
b. *a loving teenager

これは、内項が ing 形の中に組み込まれればよくなる。

- (51) a. a god-fearing man
b. a fun-loving teenager. (以上 Grimshaw)

これに反して、心理動詞は他動詞であるにも関わらず ing 形容詞は外項だけで成り立っている。即ち、Experiencer が現れていないのに許される。もし Experiencer が顕在化するときには、to をともなって現れる。

- (52) a. His statement was very confusing to me.
b. The clown's stunts were highly amusing to the boys.

Experiencer が現れなくてすむのは形容詞の時だけであり、動詞の場合には必ず二項共顕在化しなければならない。

- (53) a. Your story astonished *(me).
b. It surprises *(me) that you left so early.

Pesetsky も Grimshaw も、現在分詞形容詞の派生については触れていない。しかし、どちらにとっても都合の悪いものであると思われる。Pesetsky にとっては、これは明らかに Myers の一般化に対する反例となり、彼が提案するゼロ形態素の存在を更に疑わしいものにする。Grimshaw の分析では、例えば複合動詞を形成する際、項構造の低位の方から順に満たされていくはずなのが、心理動詞 +ing で Experiencer が顕在化しないのはなぜか。Experiencer を抑止するような規則を考えるべきであろうか。受動形を形成するときに抑止されるのは外項であり、この規則は外項の意味内容つまり θ 役割そのものには言及しない。Experiencer の抑止というのは、具体的な θ 役割 Experiencer を指定することになり、抑止規則としての一般性を保つためには望ましいことではない。

心理動詞以外の現在分詞の場合、必ずしも形容詞化しているとは言えないものも多いが、先に述べたように、いずれも自動詞の主語＝外項が修飾または叙述の対象になっている。また、

Fabb (1984)が形容詞の基準に多少なりとも合うものとして挙げている動詞の現在分詞形のリストの中には、例えば次のようなものがある。

(54) appealing, promising, searching, forgiving, misleading, ...

appeal 以外はいずれも元々目的語を必要とする他動詞であり, promise は誰か人に約束する, search はどこかを捜す, forgive は人を許す, mislead は人を誤った方向へ導く, そして appeal の場合でも誰かに訴えることが含意される。ここで含意される物あるいは人は指示対象が不特定の漠然としたものである。従って, これらの動詞の中には目的語を削除して自動詞化しているものもある。

(55) a. I promise.

b. Forgive and forget.

Rizzi (1986)は, 目的語が顕在化しない次のような文では, lead の目的語となるべき θ 役割が (57)の規則によって語彙構造で arb として満たされる (saturate) という主張をしている。¹¹

(56) This leads to the following questions.

(57) 動詞が直接にとるべき θ 役割を arb で満たせ。

(57)のような arb 付与規則が(45-48)(54)のような ing 形容詞を形成する過程に関与していると考えられる。¹³Rizzi においては, arb は generic な素性であるが, ing 形容詞における顕在化しない目的語がすべて generic なものを指すとは限らない。例えば心理動詞 +ing の場合顕在化しない Experiencer は, 多くの場合話者自身を指している。こうした個々の動詞の特性に関わる arb の付与は, 語彙的概念構造(LCS)で行なわれると考えてよかろう。LCS で満たされた θ 役割は, 項構造において動詞を ing 形容詞に転換する語彙規則が適用する際にはゼロとみなされ, 外項のみをもつ自動詞と同様の扱いを受ける。しかし項としては存在しているので, これが統語構造に投射されないと「投射の原理」に違反して非文となることは(53)で見た通りである。では, なぜ(55)や(56)が目的語なしに可能なのだろうか。lead や promise は語彙的な性質によって, 項構造で arb として満たされた内項が削除されるか, または LCS から項構造への投射がなされないと考える。項構造ですでに外項のみとなっているので, 統語的にそのままの形で実現しても「投射の原理」に反しない。動詞のどのような性質がそれを可能にし, 心理動詞のどのような性質がそれを阻止するのかについては, これらの動詞の意味的な概念構造をより詳しく検討する必要がある, 今後の課題となろう。

この節では, Pesetsky や Grimshaw が取り上げていない心理動詞の ing 形容詞の可能な派生について考察した。重要なことは, 心理動詞の特異性は LCS における意味構造に反映され, 項構造では Cause に相当する項は外項として表示されなければならないということである。

形容詞的 ing 形を形成する規則はこのような外項に言及する規則と考えられる。

5. むすび

本論文では、心理動詞の分析として Pesetsky (1990) 及び Grimshaw (1990) を検討し、各々の問題点を指摘した。特に frighten 型心理動詞から派生する ed 形容詞と ing 形容詞の特性を十分に説明するには、どちらの分析も不十分であり、より一般性のある語彙構造を仮定しなければならないという主張をした。第3節、第4節で述べたように、ed 形容詞を派生する規則も ing 形容詞を派生する規則も、どちらも外項に言及する必要がある。外項とは θ 役割の内容は問わない構造的な概念であり、この種の規則のかかるレベルを項構造として概念構造とは区別する必要があるという点では Rappaport & Levin や Grimshaw 等の立場を支持する。

心理動詞の概念構造の厳密な形式化と、項構造との関係の形式化は、本論文では試みる余地がないが、概略次のように考えている。fear も frighten も基本的に、感情を引き起こすもの (Cause としておく) と感情をもつもの (Experiencer) をとることでは共通である。更に、Event 性があるかどうか、Affect 性があるかどうかの情報がなんらかの形で表示される必要がある。¹⁴ここで冒頭の問題に戻るわけだが、なぜ同じ Experiencer 及び Cause が fear と frighten とでは違った統語的実現をするのであろうか。これは frighten 型の動詞のみがもつ Affect 性に関わっていると考えられる。frighten のとる Experiencer は [+affected] である。Experiencer は多くの言語で外項となるのが無標であるが、[+affected] なものはその θ 役割のいかに関わらず内項として項構造に現れるのが無標であるとするのは、かなり自然な原則であろう。従って、frighten の項構造は fear とは異なったものとなり、既に見てきたいくつかの相違点が説明できることになる。詳しい考察は心理動詞以外の動詞に範囲を広げる必要があり、稿を改めることにしたい。

注

1. Predicate Argument Structure は Rappaport & Levin (1986), Argument Structure は Grimshaw (1990) の用語である。各々の項構造の概念はかなり異なり、特に Grimshaw は各項間の階層性を重視している。
2. Belletti & Rizzi (1988) 参照
3. 例えば Farrell (1990) や Grimshaw は、preoccupare 型構文では、助動詞の選択や ne の現

- れ方が、真の非対格構文とは異なることを指摘している。
4. 例文は、主として Pesetsky 及び Grimshaw からのものである。出典は略して (P) (G) と記す。
 5. EO は Experiencer Object class, ES は Experiencer Subject class を指す。
 6. Pesetsky (1990) pp. 8-9
 7. 注 1 で触れたように、Grimshaw は各々の層が階層的な構造をなしていると考え、その階層が統語現象に深く関わっていることを示そうとした。
 8. Grimshaw は、これは 2 つの Cause が起こっているために排除されるという可能性に触れている。(p. 177)
 9. Grimshaw は、動詞が形容詞化することによって外項 R が付加されると考えている。R は内項を束縛するものであり、例えば(i)の文に対して(ii)の構造は Location の the volcano (=x) が R によって束縛されていることを示す。より内部の項である Theme の by craters (=y) は削除できない。
 - (i) The volcano was rimmed by craters.
 - (ii) rim (x(y)) → rimmed (R <=x> (x(y)))
 10. ここで Cause と名付けたのは便宜上のことであり、Subject Matter といってもよいかもしれない。Causative 分析を前提にしているわけではない。従って Cause が目的語として実現しても構わない。
 11. Jackendoff (1990) は概念構造をいくつかの層 (tier) に分け、その内の 1 つである action tier が、frighten (Event 読み) と please では各々次のようになっていると考えている。
 - (i) X (suddenly) frightened Y

$$[_{\text{Event}} \text{AFF}^- +_{\text{VOL}} ([X], [Y])]$$
 - (ii) X pleases Y

$$[_{\text{State}} \text{AFF}^+ ([X], [Y])]$$
 12. (56) に対応するイタリア語の空目的語は、英語の空目的語と異なり、統語的な性質をもつため、Rizzi は pro と分析している。この pro は frighten 型動詞の空目的語としても生じる。このため、(53) のようなイタリア語は可能である。(Rizzi p. 536)
 - (i) Talvolta Mario colpisce/spaventa/preoccupa/impressiona/meraviglia ———.
 ‘Sometimes Mario strikes/frightens/worries/impresses/amazes ———.’
 13. 同様の主張は丹羽(1990)によってもなされている。丹羽は fascinating には(ii)のように arb による語彙的飽和 (lexical saturation) が起こっているとしている。

- (i) fascinate: (AG, TH)
- (ii) fascinating: (AG, THarb)

この語彙的飽和は -ing が添加され、接辞が動詞の θ 格子を引き継いだ後に適用されると考えている。従って(i)は TH (丹羽は Experiencer を Theme と分析している)なしで実現することはないとする。

14. LCS は単に θ 役割を並べたものではなく、Jackendoff が行なっているような意味の分解がなされた表示と考える。Rappaport & Levin 参照。

参考文献

- Baker, M. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.
- Belletti, A. and L. Rizzi (1988) "Psych-Verbs and θ -theory," *NLLT* 6, 291-352.
- Fabb, N. (1984) *Syntactic Affixation*, Ph D dissertation, MIT.
- Farrell, P. (1990) "Psych-Movement as P Incorporation: Evidence from Italian," *NELS* 20, 106-120.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.
- Jackendoff, R. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge.
- Niwa, M. 丹羽牧代 (1990) 「現在分詞による名詞修飾構造——-ende と -ing の比較から」近代英語研究 7, 55-72.
- Pesetsky, D. (1990) "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," unpublished ms., MIT.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Rappaport, M & B. Levin (1988) "What to do with θ -roles," in W. Wilkins ed. (1988) *Syntax and Semantics* 21, 7-36.
- Rizzi, L. (1986) "Null Objects in Italian and the Theory of *pro*," *LI* 17, 501-557.
- Zubizarreta, M. (1987) *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*, Foris, Dordrecht.